

第二期 第二十八号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2018.11.20 定有堂書店 発行

フラジヤイル

秋の祭りとB1

台風いつか 海よりもまた深く

読まれざる名作についても少し

10月の日記

何気ない哀愁

花野

トカントンと馬鹿

日日は好日

鳥取あれこれ その二十七

天平の詩魂 (中)

旅とめがねと干し梅

たまごのはなし

奈良 敏行

ワクサカソウヘイ

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

うしきのどか

五百川知子

戸國 航

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

あきの素生

ドラメリア



…… 編集後記

フラジヤイル

奈良 敏行

(定有堂 店主)

十月は多忙だった。少し自分を変容させようという気分が高まっていたせいかもしれない。流れにまかせ、辿りついた岸边から、歩み直してみようという心境だった。いろいろな問い合わせにいいねいに付きあい、自分の折り返し地点を見つめる機会に恵まれた。

BEAMS(ビームス)とごうファッションブランドの方々の取材があった。暮しを提案するレーベル「フェニカ」で民藝を訪ねて鳥取に入った流れだった。一行五人のうち、カメラマンの山本あゆみさんが鳥取出身と知り、少しホッとした。店内を一緒に見回ることとなり、意外なところで面白がってくれるのが、勉強になった。

数日後には、FM 山陰の加藤さゆりキャスターが、スタジオから電話インタビューをしてくださった。口下手なわたしが、つい長話をしたくなるような加藤さんの

人柄に引き込まれ楽しかった。

二組の人たちが期せずして、開口一番に投げてきたのが、「全国の書店員さんの聖地と言われてますが、どんな点でそう言われていると思いますか？」だった。そんなことはない、と思いつつも、でもなぜなのだろう、と自問自答した。

一九八〇年十月に開業したが、鳥取に移住したのは七月だった。すぐに「タウン誌」の人たちと親しくなり、加わっていた朝日新聞の〇記者が紙面に紹介してくれた。見出しが「本が好きなひとが本屋をはじめた」で、すべてはこれが始まりだった。「本が好き」というだけで本屋が始められるのなら、自分も開業したいという人が、たくさん訪ねて来るようになった。現在も繁栄を重ねている著名な人もいるし、うまくいかなかった人も大勢いる。

結局は、素人で始めたという距離の近さだったのだろうか、いまはそう思う。

「お店の特徴、キーワードは何ですか？」とも聞かれる。「ゆるい」ということでしょうか、と答える。距離が近いので普通に品揃えすれば足りる。二歩も三歩も先回りした品揃えでなく、同じ歩幅で品揃えしていけばそれで十分。お客さんに昨日教わって、今日仕入れる。当然少し遅れることとなる。二つ目のキーワードはだから、

「遅れて売る」ということになる。

「本屋をはじめて三十九年ともなると、お店作りも当初と変わりましたか？」とも問われた。「縮小」という言葉がすぐ思い浮かぶ。本屋の場所は変わらないのだが、最初は表通りにあつたはずが、いつの間にか「けもの道」を抜けた、「隠れ家」的な立ち位置になった。生活の圏域が三次元的に広がり、二次元的な街角は相対的に縮小してしまった。

お客さんは、「変わらない方がいい」という。やはり「遅れる」という基点を貴重なこととするのだろうか。本屋はお客さんの「記憶」を風景として残す、数少ない装置の一つなのだろう。

「縮小」は、本屋だけでなく、読者の読書環境にも生じている。本を読み語り合う環境が細いものとなつている。「読書のけもの道」も、本屋へと抜ける数少ない細い道だ。

平成生まれ初の芥川賞候補、と将来を嘱望される水原涼さんが、「高校のとき通った」と口にしてくださった『水原涼さんの『蹴爪(ボラン)』』講談社2018.7を雑誌『Hanako(ハナコ)』(マガジンハウス1167号11.28発売)で町田康さんが書評でとりあげる。その傍らに「水原涼さんも通った定有堂書店の店主」選ということで、連想できる二冊を紹介させてもらった。

見出しはわたしの気持ちを汲み、「フラジャイルな心
について考える2冊」としてくださった。『岸辺の旅』
(湯本香樹実 文春文庫)と『紙の動物園』(ケン・リュ
ウ

早川書房)を選んだ。「フラジャイル」とは「きずつ
きやすい」ことだ。でも受け身の踏込でもある。弱いだ
けではない。

「縮小」の世界では、狭いところだからこそ言える、
ということもある。水原涼さんとは、たぶんこの「フラ
ジャイル」が「変わらない記憶」の触れあいになると思っ
た。高校生のとき「fragile」という冊子を作っていて定
有堂が扱っていた。編集者もだから、通じにくいはずの
この言葉を生かしてくれた。

2018. 10. 3

一



siso

秋の祭り「JB」

ワクサカソウへイ

(文筆業)

私は時に、「お笑い」という不確かなジャンルに携わって仕事をしている。担当するのはライブ制作という業務で、簡単にいってしまえば「お祭りづくり」なわけだが、謎なのは会場に足を運ぶお客さんの、その層の九割九分が女性であるという点である。なぜ「お笑い」というお祭りは、こうも極端に女性を寄せ集めてしまうのだろうか。それは私にとって長年の疑問であった。

ヒントは意外なところに転がっていた。

ある時私は鳥の凶鑑を上梓することになり、執筆のため様々な資料を漁っていた。すると鳥の生態行動についての書の中に、興味深い一文が見つかったのである。

サイチョウウという鳥がいる。このサイチョウウのメスは出産・育児の時期に入ると、木の洞の中に身を隠す。そしてオスは、その洞の出入り口を土壁で固めて閉じ込め

てしまう。外敵からメスを守るためである。もちろんそのまま放置するとメスは餓死してしまうので、オスはその壁に小さな穴をあける。そして、その穴を通じてせつせとエサをメスに運び、ヒナが成長するまでアシストをするのである。

ただ、このサイチョウウの育児システムにはひとつ、問題点がある。オスが外界でエサを探している最中、外敵に襲われるなどして死亡した場合だ。自ずと洞の中のメスおよびヒナも生活困窮に追込まれ、一家全滅してしまうのではないか。

ところが、実際にはそうはならない。なぜか。もしオスがなんらかの事情で命を落とすことがあると、そのオスと一番仲のよかった別のオスが、代わってその洞にエサを運びだすのである。「お前のパートナーは、オレが守るぜ……」おお、なんとという友情であろうか。サイチョウウのメスは、オス同士のフレンドシップによって、安全的に育児を継続できるのだ。

なるほど。私はここでピンときた。サイチョウウのみならず、私たち人間にもこのような生態行動が本来的に刻まれているはずだ。かつて女性が村で生活を守り、男性が遠くへマンモスを狩りに行っていた時代。狩りの最中に命を落とす者がいた場合、きっとその男と仲のよかった友人が、未亡人となった女性にマンモスの肉を分けて

いたことだろう。

つまり、だ。「男と男が仲がよい」という姿は、女性にとつては「ラッキー」なこと、生命的な安心感へとつながっているのではないか。男同士がいちゃついている様子は、女性にとつて「むやみに嬉しい」という感情を呼ぶものではないか。つまりのつまり、この現象を現代では「BL」とラベリングしているのではないか。で、ここで「お笑い」に話を戻す。「お笑い」シーンというのは、内情、ほぼ男性コンビによって形成されている（もちろんピン芸人や女性コンビもいるが、大多数は男性コンビがその割合を占めているのが現状です）。「お笑い」は、男と男がふたりきりでの共同作業を生々しく露呈している、特殊なジャンルなのだ。

「お笑い」ライブの席に座る女性たちは、ただ面白いネタを見るためにそこに集っているのではない。そこにある男性同士の関係性、それを自分の目で確認し、なんかしらのポジティブな感覚を得るため、足を運んでいる向きも大いにあるのではないか。サイチョウの話から、私は一気にそう結論付けた。ちよつと大雑把すぎますかね。

この前、私が居を寄せている鳥取県八頭町の集落で「麒麟獅子祭り」があった。早朝から麒麟獅子とそれを先導する狸々が各家を練り歩く祭りなのだが、それは完全に

女人禁制の世界で、男だけで祭りの準備をして、男だけで本番の日を迎える。古来よりずっと、こういった様式でこの秋祭りは紡がれてきたのだろう。

祭りの道中は酒がしばしば提供される。男たちは酔いにまかせて、ふざけ合ったり、無意味にボディタッチをしたりする。ハレの日のムードの中で、ここぞとばかりに男同士でいちゃつくのである。私も日本酒を片手に祭りに参加し、道に這っていたハリガネムシを近くの連中の背中に入れるなどして騒いでいたのだが、そんな我々の荒唐無稽な姿を、近所のお婆さんたちが微笑ましいものを見るような目で眺めていることに気がついた。きつと百年前の祭りの日にも、男たちが嬌声を上げる姿に目を細めるお婆さんたちがいたのだろうな。

「BL」が「BL」と名付けられる前から、「BL」はこの世に存在していた。そんなことを思った、秋の祭りの日であった。



台風いつか海よりもまだ深く

ヤポネシア ⑦

芝野 浩貴

(地球探検家)

仲間のイチユがアルパカの餌になり、アルパカから毛糸をとり、そのフンは燃料や畑の肥料になる。マチュピチュに数十回行かれてるカーニバル評論家の白根全さんとリオで出会った時に、何故何回も行くのか尋ねたことがある。ペルーは環太平洋火山帯の国として5000年間、災害によって暮らしが破壊されるたびに、それを乗り越える知恵や技術を生み出してきた。地球一周と同じ距離のインカ道もその一つだが、まだ歩ききってなくて行く度に発見があるとのことだった。歩いてても、歩いてても。

那覇市の喫茶店で、沖縄産の藁が消えつつあり、伝統行事が行えないとの記事を目にした。17世紀から20世紀までは、祭り以外にもイグサやソテツを計算器具や記数法として使った藁算があった。

紙の導入で藁算は消えた。結縄といえは、インカ帝国のキープを思い出す。一説によるとキープは中華民族の始祖が漢字発明以前の意思伝達に使ったとあるが、藁算とキープのルーツは同じかもしれない。沖縄の城の石積みのかた積みとクスコの石壁の類似性の時もそう思った。日本人が一番訪れたい観光スポットのマチュピチュには行ったことないが、インカ道には興味がある。山沿いの道には江戸時代の宿場町のような駅が20キロおきで作られ、足の速い飛脚がリレーしながらキープを運んでいる。今でいうとブロックチェーンに相当する。イネの

藁が無くなりつつある記事を読んだのは、台風20号、21号が琉球弧を縦断する時で、鹿児島行きフェリーが欠航の日だった。その日、北上は諦めて、沖縄の創生神アマミキヨが降臨した久高島に向かった。前日は久高島行きフェリーも台風で欠航だったが、台風一過で沖縄は猛暑に戻っていた。南城市の安座間港から久高島の徳仁港へフェリーで20分。一周8キロなので歩くことにした。最北端のカベル岬目指して西海岸沿いを歩くと、泉の湧くヤクルガーに着く。ノロが神事の時に髪を清めるところでもある。海のダークブルーからマリンブルー、エメラルドグリーン層と白砂を挟んだ蘇鉄などの植物群の緑が青色の虹をなし眩しい。クボー御嶽は男子禁制である。12年に一度行われていたイザイホーは1990年以降途絶

えている。女性を守護神とする母性原理の精神文化を伝えるものだった。岡本太郎が風葬を取材して物議を醸したところでもある。カペールの森の両側はクバが原生林として群生しており人の手は入っていない。カミーノ。

数名いた観光客が神の島を自転車で回っていて全員に追い越された。炎天下の中2時間歩き、アマミキヨ降臨の場所ハビヤーンに着いた。柳田國男は遠浅の砂浜が続く東海岸から、本土への北上航海は始まったと推測している。その東海岸を歩いて斎場御嶽が見える港まで一周した。

その次の日、徳之島へ向かったが、台風の影響で亀崎港でなく平土野港へ寄港した。その後、種子島、奄岐島と回り、昨年の奄美大島、五島列島と合わせて琉球弧紀行が一段落終えようとした頃は、関西や北海道が台風や地震の被害にあっていた。

台風24号で本土が騒いでる頃、沖縄知事選も終わり、樹木希林の告別式も終わった。是枝監督の弔辞を文学座同期の橋爪功が代読した。山田洋次監督の「家族はつらいよ」での父親役が定着してきた頃、「男はつらいよ」を復活させる話も挙がっている。渥美清は「男はつらいよ」を撮影し始めてからは極力他の仕事は受けなかった。渥美清が車寅次郎を演じていたのでなく、車寅次郎その

ものが渥美清を通り越して田所康雄になってしまった。それでいえば、樹木希林は自然体を演じているのでなく、特に病気が発覚してからは「樹木希林を生きた」のだからう。

「台風大好きなの、なんか気持ちがいせいでいい」という台詞は、「海よりもまだ深く」で樹木希林が放った言葉である。阿部寛は篠田良多役として島尾敏雄文学賞を受賞した作家を演じている。柳宗悦は朝鮮陶器と木喰上人と沖縄を民藝への三大遭遇と呼んでいた。柳宗悦が「人文」という言葉に込めた意味を考えながら、たくみ割烹でカレーを食べたのも台風一過の日だった。カペール岬でユタを想った時、樹木希林が重なったのは偶然ではないと思う。映画から学ぶことも多かった。

11月18日、倉吉で上映される「沖縄スパイ戦史」を山陰の人には観てもらいたい。



読まれざる名作について、もう少し

△フカミヒロミ

▷フライングブックマン

読まれざる名作は、何も文芸大作だけに限ったことではない。エンターテインメント系の作品の中にもザラにある。

例えば、

あなたは、『フランケンシュタイン』を読んだことがあるですか。

「あー、『フランケンシュタイン』ね。知ってるよ。うん。フランケンってのは、怪物の名前じゃなくって、博士の名前なんだよね。人間の死体を継ぎはぎしてね、脳味噌に犯罪者かなんかの使ったもんだから、人を殺して回るのな。」

読んでないだろ、お前。

「違う違う、脳味噌は赤ん坊の使うんだよ。だから、母親のいる家に戻ってきて、財産乗っ取りを企んでる悪

い親類を殺すんだよ。」

それ、謀図かずおですから。

「フンガー、フンガー！」

……………。

なまじ映画や漫画、児童向け翻訳やパロディが溢れているせいか、それらを見て、知ったつもりになっている人が多いのではなからうか。

入手もたやすく、良い翻訳も出ているので、是非、読んでおきたいものだ。ただのホラー小説ではなく、ある種の成長小説、教養小説といってもいい「文学」であることに驚くはずだ。何せ、十八世紀の終り、社会思想家と女性運動家の間に生まれたおませな（駆け落ちの真つ最中だった）少女が十九歳の時に書いた小説なのだから、キングやマキャモンばりのホラーを期待しちゃあいけません。（余談ながら、今年と同書の出版二〇〇年！）

何でこんな話をするのかというと、筆者がつい最近、新訳が出たばかりのジョン・ウインダムの『トリフィド時代』を読んで、目からウロコが落ちたからなのである。

SF好きなら、この作品を知らない人はいない、というくらい有名な作品である。映画にもなった、TVドラ

マにもなった、子供向けの訳本もある。歩き回る食人植物という、グロテスクなヴィジュアルばかりが先行していて、何となくパニックSFのパターンで理解して、それでお終いにしていただけだが、一読、うーむと唸ってしまった。

実に、これはデイストピア小説であった。ユートピアの裏返しである。流石にトマス・モアを生んだ国だと感心した。

トリフィドは、良質の油脂が取れる植物として某国から流出し、世界中で栽培されるようになっていた。

ある日、前代未聞の大流星雨が現れ、全天を蔽う天体ショーを繰り広げるが、これを見た人々が皆失明してしまう。免れたのは、入院患者や地下作業員などごく一部の者。失明者が溢れることによって起こるパニックの様子は、まるでダニエル・デフォーの『ペスト』さながらである。

そんな中で、数少ない晴眼者が先頭に立ってコミュニティ作りが始まり、秩序化されていく。都市はライフラインが機能を停止しているの、生活が可能な場所は勢い田舎になる。まるで古代社会の部族別の集落のようにコミュニティが作られていく。

トリフィドはどうなった、という声が聞こえてきそう

だが、野生化した植物は彼らの生活を脅かす最大の外敵ではあるが、電気式の防護柵と炎放射器で退治するという弥縫的な対策が取られるだけ。つまり、クマや毒ヘビより少し危険度の高い存在、という程度の認識に過ぎない。

トリフィドは脇役であって、食人植物が既定の存在として当たり前に繁茂する時代に、視力を失った人類がどう社会を立て直し、生き延びていくかを主眼に描いているのである。このコミュニティの仕組みや、内部の諍い、国内のコミュニティを統合しようとする独裁的な動きなど、ポリテイカル・ノベルのようでもある。

そして、流星雨現象やトリフィドの漏出は、社会主義国の陰謀ではなかったか、という疑念がそれとなく示唆されて物語は終わる。

いや、もう少し、ワクワクできる、カタルシスのある小説だと思っていたのでビックリですわ。

で、小松左京の『日本沈没』を思い出した。あれも、映画やTVドラマではパニック・シーンばかりのつるべ撃ちであったが、原作の方はしっかりした政治小説であり、シミュレーション・ノベルであった。

やはり、読まなきゃだめですねえ。

10月の日記

坪井日記 ⑩

齊藤仁昭

(長崎書店)

9月某日

高校生が二人、職場体験に来店。朝の品出しからスリッパの仕分け、レジでの接客や補充品の発注、POPの作成などひと通り書店の仕事を手伝ってもらった。書店に興味を持ってくれるのは単純にうれしい。

会話の中で印象に残った発言がある。「クラスに雑誌なんて買っている人はいない。」「コミックはインターネットでタダで読んでいる。」「本屋がなくなるのは困ると思う。」など。

生まれた時からインターネットが身近な若い人が雑誌をあまり読まなくなるのは必然だろう。しかしメジャーな雑誌のタイトルさえ知らないようだったので、いくつかの雑誌を紹介し、立ち読みでもいいから読んでみたらいいとお節介をした。

それはいいとして、コミックを買わずに読むことに全く抵抗がないというのは困った。支払ったお金が著者に

還元されることに意識がまったく向いていないようだった。お金を落さないの本屋がつぶれるかもしれない、という流れにも無頓着のようであった。消費者ではなく当事者になってほしいのだけれどと思ったが、この話は先日ライブハウスのお客さんの話ともつながるような気がする。しかしYoutubeに結構お世話になっている自分にはあまり強く言えることではないかもしれない。

お金は払いたくないが、本屋がなくなるのは困るというのが興味深い。場所としての書店に彼女らは何か期待しているのかもしれない。それが何かを考えないといけない。

10月某日

店に財布の落し物をつけたので、閉店間際だったこともありすぐに交番に届けた。届け出の書類作成に必要な質問をいくつかされるのだが、心が疚しいので警察官の前だとしても落ち着かない。いらぬことばかり考えた。汚職や腐敗が進んだ国ではこうした届け出もスルーされ警官が着服したりするのであるか。またはいきなり難癖をつけられ窃盗犯に仕立て上げられたりするのだろうか。警察権力って何なんだ。交番の人たちには善意があるように感じられるのがせめてもの救いで、しかしよ

く交番で拳銃自殺があったただの上司に発砲したものの
ニュースも見るよな、上下関係とかたいへんなのかな、
などと考えているうちに書類も出来上がり、きちんと控
えもいただいた。店に戻ったところに落とされた方から
電話があり、さきほど交番に届けたところですとお伝え
した。

10 月某日

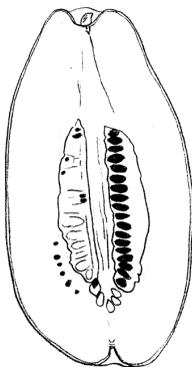
雑誌「ラテイナー」の11月号を読む。創刊66年で777
号の記念号。特集は「人生と音楽」。P.12、中原仁氏の
記事内のミルトン・ナシメントの言葉の詩情がすばらし
く、心が洗われた。「ミナスの人間は、心の中に海を持っ
ているんだよ。」ミナスジェライスには海はない。海の
方から来た人々の話や文化を通じて海を感じる。想像す
る海。見たことはないけれどなつかしい景色。自分はこ
んな詩情で演奏したことないや。音楽や演奏も少なから
ず環境に作用されているのだなと思う。日頃からもう
少しだけ風景や想像に注意して観察してみようと姿勢を
正された。

アントニオ・ロウレイロのインタビューも面白かった。
新譜のタイトル曲「Live!」について「今日の人類に対す
る僕の印象を表した歌詞がついています。」アルバムに

については「抑圧、表現の自由、愛を通じた抵抗、愛を尊
重すること、そして人生について歌って」いるとのこと。
真摯。こんなに真摯に演奏したことがないやい。もつと
真摯にやってみよう。

店の棚を整頓中に、DU BOOKSの『ジャズという何か』
(原雅明著)を何気なく手に取って読んでみるとカート・
ローゼンウインケルについて書かれたページにロウレイ
ロも登場。いいタイミング。併せて読もうと購入。読ん
でいると現代のジャズとヒップホップの関係を考えざる
を得ないのだから『J・デイラと《ドーナツ》のビート
革命』も読みたくなるがなにより音楽理論を勉強しない
と先はないなと思うにいたる。

Quince



何気ない哀愁

うしきのどか

(公立鳥取環境大学

環境学部)

最近『フジファブリック』というバンドにはまってしまった。メジャーデビューは2004年とそんなに最近のバンドではない。だけど今、私の琴線に触れた。

感謝祭(環境大学では学校祭をそういう)にバンドが二組ゲストで来ると聞いていたのでネットで予習しようとしていた。しかし、動画サイトのお勧め動画を本当に何気なく開いてしまった。第一印象は「いい雰囲気」の曲。けれどコメント欄にあるような、もてはやされるようなものをこのバンドに感じなかった。ただ、そんなに言うのなら…と聞き続けた。1、2日では引っかからなかったのに3日目、『銀河』という曲に「やられた」。

楽曲はよく聞くJ-POP。歌詞も平易な言葉ばかり。し

かし、それが彼らのわけのわからない世界観なのに爽快感があるという不思議なセンスを教えてください。そこから最初の方に聞いた曲を聞き直し、一気にファンになった。

ネットで彼らをよく表現している文章があった。「夏や冬をイメージするバンドは多いが、彼らほど秋を感じるバンドはない」と。正確な引用ではないが、言っていた内容はほぼあっていると思う。多くの曲ははつきりとしたテーマを持つものが多い。けれど、このバンドの楽曲は秋の持つ曖昧さ似ている。音楽で暮らしているとは思えない歌唱力もメロディーも。

その中でも一番の魅力は歌詞にあると思う。微妙な感情が、何気ない風景が、簡単に想像できる。でも、それはみんなが同じものを思い浮かべるのではない。だれもが持っている体験を、けれど、とても個人的な体験として蘇らせてくれる。(先述の銀河はちよつと毛色の違う曲なので逆に思い浮かびにくい)

『陽炎』という曲にこんな歌詞がある。

『窓からそつと手を出して

やんでた雨に気付いて

慌てて家を飛び出して

そのうち日が照りつけて
遠くで陽炎が揺れてる 陽炎が揺れてる』

私にはこの「音信不通」の、この私の記事を読んでく
ださる方がどんな方か知らない。けれど一度でも日本の
雨上がりを知っている人ならこの情景を思い浮かべるこ
とができるのではないだろうか。雨上がりのあの何とも言
えない、嬉しさのような、言葉で表せない感情も。でも、
どんな雨かどんな家かはそれぞれ異なるだろう。だから
こそ掴みづらい何気ない哀愁を共感できるかたちにして
いるのだろう。

ただただ、凄いと感心してしまう。

他に探せばそのような文章を書く人はほかにいるのか
もしれない。でも、私にとっては、何気ない哀愁をここ
まで感じさせてくれるアーティストは、初めてだった。

今は一部のアーティストが揶揄されるように、歌詞に
意味がなくても売れる。カッコよさ、可愛さやダンスな
どそれはそれでいいと思う。ただそれにしても、あまり
にもそれが流行を席卷してしまっているように感じる。
音楽の楽しみとは、音で伝えることだと思っている。歌
詞は文学的で皮肉めいてて、伝えたいことを爆発させる
ような曲が好きな私からしたら、今の風潮やあまり音楽

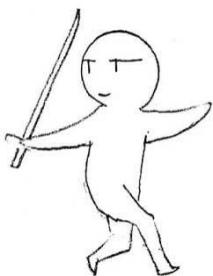
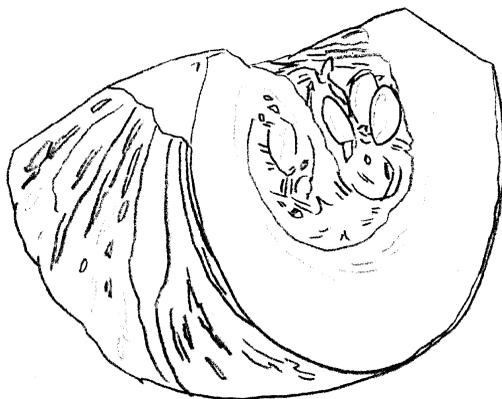
をじっくり聴かずに聞き流す時代は悲しい。高校の授業
では国語が事務的な文書と文学の選択になるかもと聞い
た。文学とは親しみにくいものだっただろうか。逆に、
こんな掴みづらい感情をうまく表現しているものにもつ
と出会うべきじゃないだろうか。

今回は、批判めいた文はやめようと書き始めたのに、
無理だったことを最後に告白します。



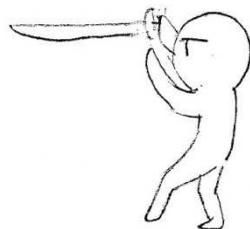
Horseradish

pumpkin



一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階



花野



五百川 知子

アシル

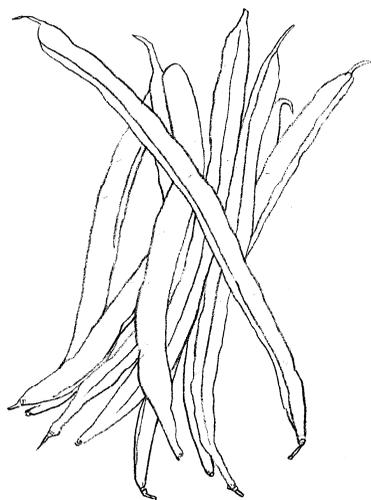
曇天の花野に惹かれ来たりけり

褐色の螺旋階段秋の声

雨樋に乗るもありたりカリンの実

考へのとりとめもなく長き夜

雲龍のひときは白し障子貼る



Ingen

トカトントンと馬鹿

戸國 航

(鳥取西高二年生)

太宰治の小説の中に、トカトントンというものがある。話の内容は、主人公がとてつもないような情念に突き動かされるとき、決まってトカトントンという金槌を叩く音がして、それきりどんなことにも無関心になつて呆けてしまうというものである。

私が初めてこの話を読んだ時、私は自分の幼少期を想起せずにはいられなかった。六歳の時分、私がシャワーを浴びて脱衣所の窓の蚊帳をぼうつと眺めているとき、突如として「私の見る世界は私しかみていない」という至極当たり前の感情が胸に去来した。しかしそれを感じた当初は、私はこの感情にどう付き合つてよいのか分からず、ただ困り果てるしかなかった。自分はどうしよう

もなく孤独な存在であり孤独のままに死んでいくということが胸に突き刺さつて、なんだか暗闇が監獄をつくつて私を閉じ込めてしまったような思いをしたのである。と、いうのも「私だけが見ている世界」というのは私の存在しか裏付けられず、この世界は単に私の空想に過ぎないのかもしれないということをも内包する考えであった。そして、それは遅れて、しかし「私の見る世界」を悟つた後に瞬時に頭の中からひねり出されたことであつたのである。

以後、私はこの考えにずっと縛られることになつた。どんなに楽しいことがあつたとしても、ふと脳裏をかすめる例のニヒリズム的感情によつて楽しみは中断される。果ては、なんの感情も抱けなくなり孤独な「私」という存在に直面させられるのである。

そのうち、存在の不確かな自分と向き合うのがどうも耐え切れなくなつたので、やむなくナシヨナリズムに傾倒することがあつた。「日本国の中の私」を意識することで私の存在をどうにかして意味づけようと思つたのである。そうすれば、国家と私を同列におけ、——つまり一元論的なものの考えをすることができ——私と言う個人の『矮小な』問題に取り組んでしまうような、そのころの

私には難儀であった「私」と「不可思議な世界」という二項に裏付けられた二元論的思考をすることを避けたのであった。そのころの私にとっては「日本国」に関するナシヨナリズム的な諸々の事象が全てであつて、それ以外は私のあずかり知らぬことであつた。

ただ、ここで強調しておかなくてはならないことは、ナシヨナリズムには多くの人々が自己の存在を確立させるためにすがつており、私も彼らのやり方を踏襲しただけに過ぎないということだ。

私が愛国の門を叩いたのは中学に入る手前ぐらいのときだつた。

友人たちは私の苦悩や思惑の片鱗も掴まずに、あいつはただの頭のおかしい奴だ、と決め付け鼻で笑つた。私はそんな奴らに腹をたてて、さらに理論武装しようとなシヨナリズム的知識を脳に溜め込んでいくのが常だつた。

中学二年のとき、私の愛国心の高まりは最盛期を迎えるのだが、それより一年ほど前に私の担任教師にこのやり場のない感情について相談したことがあつた。その話の中で、二つ選択肢を提示された。一つは哲学について

勉強してみることと、もう一つは日々の生活に埋没すること。私は後者の方を選んだ。これ以上、孤独な私と向き合うことを考えると吐き気にも似た感情が私を襲うからであつた。しかし、今思えば、中学のときに自分としっかりと向き合つていれば今のようにならなかつたらうから、ひどく残念で仕方ない。また今私が一番悩んでいる自分の智能の低さも幾分かましになつたであらう。

しかし、ほかにも悩ましいのは何であろう、この高校生活である。私は高校に入つてすぐに馬鹿をやらかして謹慎を食らつた。私はいささか頓狂し、前よりも身の回りのことに手がつかなくなり、なんの目的もなく、ただ手近なことで快樂を得られやしないかとばかり考えていた。

そうこうしていると、日々の低俗な刺激によつて私の感性はだいぶ痛んでしまつた。磨耗したと形容するのが一番正しいのかもしれない。今では私はあの孤独な感情を抱くことが難しくなつた。抱いたとしても、すぐに日々の生活に忙殺されてしまう。昔の私からすればこれは大変喜ばしいことなのかもしれない。ただ、今の私にとつては大変悲しいことなのである。今ではあの感情をいと

おしく思うことさえあるのだ。この感情こそが私を進化させてきたのではないかと。そして中学のあのときに、感情から逃亡してしまったことを時折思い出してはひどく嘆き悲しむ。思えば、あの時から私の「馬鹿への道」は始まったのであろう。

また、可笑しい事に、最近では、あの悟りの境地に似た感情を自分から求めるようになった。なんというか、恩着せがましくも、私の知的好奇心を高めてくる古い旧友に出会いたくなつたようなものである。だけれど、私が例の感情を全身で噛みしめるのはまれである。すぐに人と自分を相対化してしまう凡俗な気持ちが湧き起り、旧友との談話の道は寸断されてしまう。

どうやったら、私は私でいられるのだろうか。日々の生活につかれはたので、最近はそのことばかり考えている。他者と比べて私があるわけではない。私があるから私がいるのである。それを分かっている人も人と比べて自らの矮小な優越感を満たそうとするのだから、私は非常に馬鹿であらう。

ともかく、私が私であるという命題は、その深層まで私が近づく際に、恐怖に満ちた孤独感を植え付けるため、

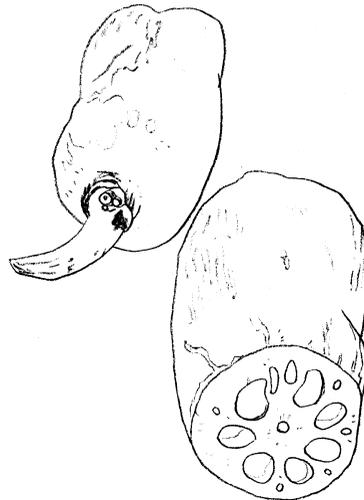
いわば「鋭い棘」を持っているのに等しい。私にとって反証を加えがたいものである。だが、現在私は考え続けてその深層までたどり着きたい思っている。それを考えずにはいられない。それを考えていくのは哲学的思考であるのだから、私は、将来は哲学の道に進むのであるろうと漠然と考えている。しかしそれを考えなくても私は卒なく人生を歩めるであらう。だが、私の脳裏の端の端に追いやられた「私とは何か」を知りたいという気持ちで逃げることを、今となつてはなかなか許さないのである。それは一種の恐怖に占拠された感情である。

恐怖—今、私は三つの恐怖に直面している。孤独の私と対面する恐怖、私が私を知りたいとする感情が消えてしまう恐怖、だんだんと発展すべきである自分の知覚がだんだんと磨り減りつつあり、様々なことへの関心が薄れつつある、という恐怖である。

トカトントンでも主人公は恐怖に駆られて、自分の現状を伝えるために友人に手紙を書いている。それにおいてもまた、だんだんと世界に対して無関心になり行く恐怖を赤裸々につづつっているのだ。私には、あの作品の主人公の手紙は、だんだんと人格が死に行くのを看過できぬ、魂の最後の叫びのように思われる。

今だからこそ、私は断言できるのだが、その人の人格の「死」は、世界に対して何の感情も抱けなかったときに、つまり「馬鹿」になってしまったときに発生する。

であるから、今ある「私」が死ぬときは、私の「知りたい」という私自身、そして社会に向けて開かれた好奇心や感性が消滅してしまうときである。よって高校二年生の現時点において、他人に、あなたがもつとも恐ろしいのは何かと問われれば、それは私が「馬鹿」になりつつあることであると答える次第である。私は、そんな訳で今の私の状態がとてつもなく恐ろしいのである。



Lotus root

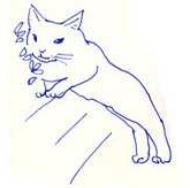
定有堂教室「読む会」 毎月一回 いずれかの火曜日

次回 十二月四日(火曜日)

テキスト

岩崎周一『ハプスブルク帝国』 講談社現代新書 2017

日日是好日



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

前号で奈良先生が、「すつきりしたいです」と言った一人の男性に、『日日是好日』を薦められた話をされていた。読後にその男性は再び定有堂書店へやってきて、感想などを話されたのだろうか？

森下典子著『日日是好日』は、以前に気になっていたことを今回、思い出した。二年ほど前、天徳寺で座禅を体験した後、禅語に興味を持っていた頃だった。定有堂書店でこの本を見つけた時、禅語の言葉だと思って開いてみたら、茶道の体験話のようだった。「なーんだ」と思って本を戻したが、隣に並んでいる本の書名が何だっ

たかは覚えていないが、「何でここにおいてあるのですか」と、奈良先生に聞いてみたい気がしたのだった。でも、話しかける勇気がなくて、「また次でいいや」と本を置いた。その後、鳥取での仕事がなくなり、定有堂書店からも遠くなってしまった。

数年前にがんであることを公表し、九月に亡くなった女優の樹木希林さんについては、マスコミで大きく報道されていたので、私もこの同名の映画『日日是好日』が十月に公開されることを知っていた。出演されたご本人が亡くなってからの公開なんて、まさに遺作となったのだ。CMでの笑いを誘う姿しか印象に残っていないので、最後の演技を見てみたいと思ひ、映画館へ足を運んだ。映画館へは小学生の姪に付き添う時のみで、自分一人で行くのは何年ぶりになるのだろうか、どきどきしながら座席についた。

主人公はお茶を習う若い典子さんなのだが、樹木希林さん演じるお茶の先生が語る言葉は、残された命を常に意識して生きてこられた人の心から出てくる、せりふではない言葉として耳に入ってきた。一か月前に亡くなったことが、どうしても頭から離れないので、私にとつて主人公は、茶道を教える武田先生だった。しかし、スク

リーンに映し出された誰もいない和室を見ていると、言葉が発しない茶道具たちが、さらには茶室の外に広がる雪月花、自然が主人公になっていった。物言わずとも茶室そのものが語っているのだ。

確か、「一期一会」も茶道と関係があつたような……あるある、私にも一期一会が！三年前、鳥取に仕事で通っていた頃、学生たちが用瀬のまちを盛り上げるためのイベントで、屋台を出すということを聞いて見に行つた。流しびなで有名なことは知っていたが、こんなに落ち着いた町並みがあるとは初めて知つた。私の好きな鹿野とはまた違つた雰囲気で、それを味わいながら歩いていくと、駅前で突然、背の高い派手な衣装を身につけた人物が目に入つてきた。頭のとつぺんには茶道で使う茶せんが髷のようにのつかつていて、「えっ？なに、あの人？誰？」と思つて、物珍しい気持ちで恐る恐る近寄つて行くとかと足が動くのだが、実際は、磁石にでもひきつけられていくかのように、彼のそばまで引つ張られていった。衣装に目を奪われるよりも、その人の持つ何か、すべてを受け入れてもらえるような優しさに包まれる感じだった。彼が持つてきた移動式の窯で参加者が絵付けをした茶碗を焼いて、そこでお抹茶をいただくというイベントだ。お茶の世界は難しい約束事がいっぱいあると思っ

ていたが、こんな風にお茶を点てていいのだ。全国各地で様々な人と出会い、手作りの茶碗でお茶をもてなし、共に味わう。なんて素敵なお茶人なのだろう。まさに一期一会の忘れられない出会いであつた。

三年前のあの日を思い出したついでに、インターネットで「用瀬」を検索してみた。なんと、今年も十一月十八日に「いなば用瀬宿 横丁さんぽ市×トトリ式屋台 楽宴プロジェクト」があるではないか！そして、私が会つた初めての茶人、きむらとしろうじんじんさんが、同じように窯を持つて来られるのだ！新たな一期一会になりそうだ。

映画を見てから本を読むか、本を読んでから映画を見に行くか、今までそのどちらもしたことはなかった。もし、あの時、「なんとなく、この本がなぜここに置いてあるのか気になるのですが……これ、禅語の本だと思つたら、お茶の体験話みたいですね」と問いかけていたとしたら、奈良先生は私にも薦めて下さつたかな？どんな言葉で？いずれにしても、一冊、取り置きお願いします。

鳥取あれこれ その二十七

内田克彦

(地域研究家)

一九二五年一月二六日に開会された第五一回帝国議会は、翌年二月一七日に衆議院に提出された「婦人参政ニ関スル建議案」を三月二四日に上程後直ちに可決した。その後、次に掲げる記事が一九二六年六月一三日発行の『婦女新聞』に掲載されている。

(承前)

碧川かたは、「おもいで」(『看護技術 12月号』昭和32年12月20日発行)の中で、婦人参政権について、次のように書いている。

第50議会には婦人参政権の建議案が通過をみ、第50議会には坂本幸太郎代議士によって衆議院に法律案が提出され、衆議院のみ通過をみたのでした。

しかしながら、一九二五年三月に第五〇回帝国議会が終わって後のかたの動きが見えてこない。四井幸子氏が市川房枝記念館から入手された一九二七(昭和二)年一月一五日付押印の「婦選獲得同盟」宛の速達ハガキには「三派理事長 碧川かた」とあるため、それまでは「婦人参政三派連合会」が存在し運動をしていたことがわかるが、具体的な資料を見つけないことができない。

母性保護問題講演会

日本母性保護協会では十二日中央仏教会館に母性保護問題に関する講演会を開いた。演題と講師は海外の母性保護法について(生江孝之氏)母性の自由(高橋千代)母体と禁酒(碧川たか「ママ」)その他。

「婦人参政同盟」の高橋千代もともに講演しているから、婦人参政権運動においても同一歩調を取っていたのだらう、と推測するしかない。

次にかたの名が出てくるのが、一九二六年一月二四日に開会された第五二回帝国議会の会期中の時である。(因みに、一月二五日に病氣中の大正天皇が崩御したため、開院式は二六日に行われた。)今議会に対する運動方針を決める会合が翌年一月一〇日に開催されており、『市川房枝自伝 戦前編』には、次の記載がある。

本郷の文化アパートで、婦人参政同盟・婦人参政三

派聯合会・女子参政協会・獲得同盟の四団体代表の会合を計画実行し、その結果、婦選団体聯合が成立し、共同運動を行なうこととなった。

この日は、法律案に進めること及び一度婦人に理解ある代議士を招待して提出議員を決定することを決めただけであり、後日の打ち合わせで招待会を一月二〇日夜議會内の燕楽軒で開催することとした。

ところが、状況は急変する。その後のことは、一九二七年五月一五日発行の『婦人参政同盟会報』第三号から引用する。

こえて十五日、碧川氏より都合により今議會運動に参加せずといふ通知がありました。翌十六日獲得同盟にも同様速達にて通知せられました（其の後三派連合会は解散しました）

先に紹介したハガキの文面は次のとおり書かれており、このハガキがまさに通知されたそのものなのである。

拝啓昨日お電話申上げましたがねんのため今一応申上ます廿日の代議士招待会には私の方の会の都合によりまして参加致しかねますからどうぞ悪からず思召て

下さいませ

第五二回帝国議會は、「婦人参政権法律案」（衆議院議員選挙法改正法律案）を一九二七年三月一七日に衆議院に上程し、一八名の委員会付託となったが審議未了となった。

一方、かたは鷺尾よし子と、兩名を理事とする「女権擁護会」を設立、一九二七（昭和二）年三月に『女権』を創刊して新たな動きを始める。

しかしながら、以前から病気がちであった息子の道夫が、一九二六年夏に京都の日活撮影所に移っており、迎えた冬の厳しさから京都医大病院に入院することになったためであろうか、或いは生活のためであろうか、碧川家あげて京都に移ることとし、『女権』は三号目となる五月号を五月一〇日に出したところで終わるのである。

現在、『女権』は創刊号のみが県立博物館に所蔵され、残念ながら四月号、五月号を目にすることができない。何とか入手して、一く三号を通読することにより、この時点での、かたたちの思想を解読してみたい。

（以下、続く）

天平の詩魂 (中)

秦阜梅林 (やすおかばいりん)

(楽人)

0

「新しき年の始めの初春の、今日降る雪のいや重け吉事」：当初、なんて諄いおめでたひ歌なんだらう！と一顧だにしなかつた・此の歌に込められた願いの切なさ、「予め未来を祝ふ」と云ふ莊重な想ひ、そして僅か31文字の宇宙に、詞を重ね掛け乍ら祈りを深めゆく和文法の妙。此等に暗く、欧風の価値観に縛られた僕の浅慮ではある。勿論、因幡に於て詠まれた此の一首を以て萬葉総てが閉られる、家持の生涯を貫いた想ひ、時代を鑑み数々の苦難の中に名を残し結果的に家門の誉こそ實現した棟梁の深慮が読みとられやう訳も無い。

I

「春の野に、霞たなびきうら悲し。この夕影に鶯啼くも」劇中、中山氏の文章を紐解きつゝ樂想を膨らませ作曲した作品。特に巧む事無く詞を声に出し、自然に生まる々樂興。初めから多声部に唱はれ極めて交響的な想を展開してゆく、本来は管弦樂に拠る。パートをピアノの獨奏で歌ふ、胸中に管弦の雅を抱く者だけが奏でられるそれ。複雑なポリフォンは心の声に訊き其の研の豊かさに聴くイメージが特に要求される…(混声四部合唱に児童合唱を加へた、些かルネサンス中期バロックの如きシンフォニーサイズ！の編成で描かれた)がさて、詩興に沿ふものと成り得やうか？

II

「うらうらに、照れる春日に雲雀上がり、情(こころ)悲しも独りし思へば」何と云ふ詩情。近代の口語自由詩に作曲するのと何らかはる事も無いいつものスタイルで書けた。万葉は素朴でおおらかで大味。底の浅い文学、といふ現代の萬葉観が單なる偏見である事は此の一首だけを以ても容易に知られやう。W.ワーズ

ワースやE.

デイキンソンばりに大自然を伸びやかに謳ひ、人の心と対比させてゐる静かな風景。其処に晩年のブラームスに通ずるそこはかとなき空気の漂ひ諦念に詫び、そしてあはれが加はつていよいよ極まりゆく悲しみ。「対」である男女「ふたり」に対し、此処にはもはや独りのみ。寂寞孤愁が、妙に爽やかに詠はれかなしひ。

III

以上今回の催しの為書き下ろした「家持の3つの歌」のテキスト全文とメモである。家持は遡る事半世紀、初めての？ 作品とも考へられてゐる詩（僕は更に幾つかの習作が在ったのでは？）と想ひはかつてゐるが…を遺して居る。其れを文末に掲げ今日は一ひとまず、ペンを置かう。「振仰けて、若月見れば、一目見し眉引念ほゆるかも」…16の歳の作と傳へらるゝ一首である。

以下次号。

2018. 10. 20

※「うらうらに」は演奏団体の都合上一度割愛されたが、劇中音楽としてピアノ独奏版が全曲披露された。

【今回の一枚】

- J. ブラームス、①クラリネット三重奏曲イ短調 作品114K. ライスターCr.T. Ch. エッセンバツハPf 他 (Rec. 1968) ②同クラリネット五重奏曲ロ短調作品115V. チーハ cr.L. スメタナSQ (Rec. 1964)
- ③同4つのピアノ曲作品119R. フィルクシュニ― PF (1969. 01. 04 クイーン・エリザベス・ホール LiveBBC 放送録音)

画. A. T



旅とめがねと干し梅

あきの素生

(くうねるめがね)



りそうだったこと。もうひとつには、計画的なスケジュ
リングがべらぼうに不得手であることが、山陰本線の旅
の実現を妨げていたのだろう。

テツ、と名乗れるような知識はないのだが、鉄道は好
きだ。九州に行けば、車体の格好よさに惹かれてシャツ
ターを押すし、学生時代に青春18きっぷで旅をした友人
とは、社会人になってからも、ぼつぼつと観光列車に乗っ
て出かけたります。廃棄車両の床材で作ったコースター
なるものを見かけたら、思わず手を伸ばす。ゆるゆると、
ミーハーに、鉄道を好ましく思っている。

もう20年近く前になる。どこかの待合室で手に取った
雑誌の特集が、日本中の景色のよい路線を紹介するもの
だった。その中には山陰本線も含まれていて、海のすぐ
近くを走る鉄道の、美しい写真が掲載されていた。いつ
か下関まで列車で旅をすると本気で思った。鳥取に来て、
これはあの夢を叶える絶好の機会だと再び本気で思った。
でも、いつかいつかと思っているうちに、ずいぶん月日
が流れてしまった。ひとつには、べらぼうに時間がわか

しかし、唐突に好機がやってきた。島根県は益田市に
ある、島根県立石見美術館で、めがねをテーマとした美
術展が開催されるというのだ。鉄道は好きだが、めがね
はもっと好きだ。めがねは、ブルーライトからもドライ
アイからも私を守ってくれる(はず)。体力のない自分
の「持続可能な働き方」を支えてくれる、戦友のような
存在だと思っている。形もいい。日頃お世話になっ
ていためがねに愛着を感じ、めがねのデザインが取り入れら
れたあれやこれや(リングやペンダント、ピンバッジ、
Tシャツ、ぽち袋など)を買い集めているうち、どんど
んはまっけてきて、今に至る。

そんな有様なので、この展示には万難を排して行か
ばならぬ、と妙な使命感に駆られ、益田行の計画を立て
始めた。片道4時間強の旅、車で行けば、着いた先でも
便利だし、途中、松江や出雲にも自由に立ち寄ることが
できる。ただ、体力的なことを考えると、そんな旅程を
こなせる自信がなく、二の足を踏む。やはりここは鉄
道で、本を読み読み、疲れたら眠って、益田まで連れて行っ
てもらおうことにしよう。下関までではないけれど、あこ

がれの山陰本線を堪能しよう、と腹が決まった。列車の時間や行先の地図など確認し、大まかなタイムスケジュールを考えて、宿を取った。最初に押さえていた日程が台風で流れたりもしたが、何とか旅に出ることができた。

列車の旅のお供は干し梅だ。かさばらず、もし乗りも酔いしてしまっても、酸っぱさとしよっぱさで幾分すっきりさせてくれそうだから、大抵持つて行く。干し梅をかじってお茶を飲み、車窓を眺めつつ本を読む。こんな贅沢な時間はないなあ、と思う。

山陰本線の旅は、結論から言えば、とてもよかった。

鳥取〜米子間はこれまで何度も往復しているけれど、何時までに行かなければならない、というのがほとんど（大抵はそうだ）、こんなに景色を楽しんだことはなかったかもしれない。朝一番の列車だったからか、途中の田圃に白鳥の姿があった。何基も立ち並んでいる風力発電の風車の間を列車が走っていく。進むにつれて、巨大な風車のフォーメーションが変わっていく様は、何だかシニールで目が離せなかった。島根に入ってからからの景色で印象深かったのは、青い海と石州瓦。あの赤が車窓に現れたときは、はっとした。海は、夏の抜けるような青さではなく、少しだけ深く、重たく、冬の鈍色を奥

に隠しているような、落ち着いた青だ。手前に石州瓦の家並み、右手に日本海、左手の浜辺に風車がずらりと並んだ絵のような光景が、一瞬だけ見えた。一瞬だったので、写真を撮り損ねたが、強く記憶に残っている。西に行くほど、海のすぐそばに線路が通っているところが多く、打ち寄せる白波が間近に見えた。

そのほかにも、こんもりした小さな山のトンネル、鳥居と大きな狛犬が建っていた川の中の小島、広々とした海岸、奇岩など、見どころがありすぎて書ききれなかった。益田到着後の話はまた書きたい。（おそらくつづく）



イラスト・あきの素生

たまごのはなし



ドレメリア

(座敷わらし)

たまごが好きだ。すこぶる好きだ。

いつ頃からそうなのか覚えていないけれど、卵料理をよく好んで食べているなあとと思う。自分でも料理とにかく卵を付けたがり、はっと気がつくとき和洋中間わずスープになっている。外で何か食べるときもそうだ。茶碗蒸しやだし巻き玉子が出るとほくほくしながらいただく。中華なら天津飯やカニ玉が食べられたら、もうそれだけで満足できる。

ファストフードなら断然月見バーガー。これは秋の時期にしか出ない限定メニューなので、いつも九月が来るのを心待ちにしているのだが、今年も東京行きであわただしくしているうちに販売が終了していた。悲しくてしばらく落ち込んだ。

一番好きなのはオムライスで、食べ歩きにはとんと興味のない人間だが、これだけは機会を逃さずあちこちに食べに行く。メニューにあればとりあえず頼んで、ここは昔ながらの薄焼きタイプ、こちらはとろとろ半熟タイプ。ソースはデミグラスにトマト、ホワイトソースとこだわりなくどれも美味しく食べる。初めて入ったお店で

最初のひと口をいただく瞬間がたまらなく好きだ。

ただ、これだけ好きでも、自分は本質的には貧乏舌なのだろうと思う。先日、パンケーキが人気で県内外からお客が押し寄せる卵料理のお店で、念願のオムライスを食べた。普通に美味しかった。が、卵の特別な味わいはまったくわからなかった。一パック八八円の卵とこのこだわり高級卵。両者で同じオムライスを作り目隠しをして食べたら、きつとわからないだろう。だが、それもいい。特別でない気軽さが、オムライスのいいところなのだと思ふ。



・編集後記:

東京から戻って一段落。一息ついたときには月見バーガーが終わってました。また来年！

ドレメリア(編集長)

麻野嘉史さんになんとかしてもらったグーグル検索。

<http://teiyu.na.coccan.jp/> 上のアドレスが

ヒットしはじめました。「定有堂」と入力すると、

本屋入口写真の下にウエブサイトと表示があります。

ここからも入れます。

奈良敏行(発行人)